マンスリートピックス

1. まだまだお寒い“土木計画学”
2. “何々屋”にはなりたくない
3. 人間のための技術，はあるのか

1. 春の芽ばえがそこここに感じられる今日このごろ，順法ストによる大騒ぎが新聞紙上に繰り返し報道されている。“春になると人々は大騒ぎしたくなるものだ”などというふざけた輩の意見は別としても，どうにかならぬものかと思うのが私を含めた世人の考えであろう。鉄道満員・道路満車の現状をみるにつけそれらの施設をつくってきた土木屋も，“お上の計画が悪いのさ”の一言で片づけるにはあまりにも寝ざめが悪かろう。土木計画という言葉は数千年の昔からあるにせよ，わが国での土木計画は，そのシンポジウムがやっと第6回を数えたばかりということ一つをみても，お寒い状態であることはそれを行なっているわれわれ自身が一番よく知っている。この騒ぎも大本を考えてみれば，その原因は国鉄の赤字財政を引きおこした一点集中型の都市構造にまでさかのぼり，計画者の怠慢こそが責められるべきである。

ところで土木計画は，現在一つの大きな壁にぶつかっている。すなわち，従来から行なわれてきた外挿法による予測を中心とした需要追随型の計画は価値観の転換した今日の大都市において破産し，オペレーションズ・リサーチを中心とした最近の数理計画的方法も，その実施面において多様化した複雑な現実に対し，十分に活用されているとはいいにくい。このような暗黒の扉の中でのたうつ計画学に対し内外の批判はきびしく土木屋の中でさえも十分理解されているとは思えない。土木計画学は，いま冷い霜柱の中できたるべき春に備えて，養分を一生懸命吸っている若草である。各位の暖い春風を期待したい。 [J]

2. われわれ日本人は，よく，“俺は土木屋だ”とか“機械屋だ”とかいう言葉を好んで使いたがるし，また忠実にも，その言葉を行動の上でも堅く守っているようである。ご多分に洩れず，土木の世界でも“構造屋”とか“土質屋”とかいう言葉をしばしば耳にすることがある。こんな呼び方をしているうちはまだ愛嬌ともいえるが，実際に仕事をするときにも，こんな言葉に固執されたのでは，とてもかなわない。

最近，よく境界領域の問題が騒がれている。たとえば，土質力学と地質学の境界領域，地震工学と地震学とのそれなど。境界領域を問題にするということは，逆にいえば，境界でない領域にあまりにも執着しすぎているということにほかならない。われわれが対処している自然にはなんらの領域もなく真理がただ一つあるだけで，それを究めるためのアプローチは無数あって，“何々屋”だけで解決するほど簡単なものではないはずである。土木工学とは総合工学であるといわれる所以もその辺にあるのではなかろうか。

どうも“何々屋”さんになりたがるのは，大学時代に，構造力学とか，水理学とか土質力学などという教科の中でいじめられながら育ったわれわれの異様なノスタルジアかも知れない。 [S]

3. さる3月 20 日，注目の水俣裁判で患者側の全面勝訴の判決が下った。このことは，これからの企業公害に大きな方向を与えたことで重要な判例であろう。しかし，われわれ国土の土地利用をあづかる者の眼でみれば，水青き天草の海や水俣湾の有機水銀汚染は依然現存のままであり，海底のヘドロが浄化されたわけではない。戦後，われわれ土木マンは，技術に行政に全力をあげてせっせと人間をいれる容器をつくってきた。道路しかり，河川しかりである。たとえば，道路をつくる。道路には善人も悪玉もそれぞれの生活が走る。道路は人間社会の一つの容器だから，だれが通ろうと基本的人権があるから容認できる。ダムをつくる。水は地域住民も企業も受益者になりうる。このように，土木施設という容器は，万人のために社会の大きな安心に貢献している。ところが，近年，人間——それが何びとであれ——の健康と生命がいまわしい微分子の侵入によって蝕ばまれはじめた。PCB, BHC, カドミウム，有機水銀，排気ガス……われわれの眼にみえない遺伝子的ルートで，われわれの体内に迫りつつある。そして，水，空気，土壌，植物など汚染環境の中で，人間は生活せざるを得なくなった。一体これはどういうことか。これらの害物の発生を停止させ，または処理する問題は，生化学や工業化学だけの分野なのか。これらの問題に，土木はどう働きかけうるのだろうか。いくらよい容器をつくっても，中で生活する人間が害物に遺伝的に侵されていては，人間の技術というものはないに等しい。 [C]

Vol. 58-1月号から3月号までの本欄の執筆は，下記編集委員が担当しました．
J. 松本正敏，S. 中井　博，C. 中村　宏．